

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372700932		
法人名	社会福祉法人 成仁会		
事業所名	グループホーム みどり		
所在地	熊本県阿蘇郡西原村布田 845		
自己評価作成日	令和3年1月24日	評価結果市町村受理日	令和3年4月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年2月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

広報誌「しあわせがいっぱい」は家族に好評である。職員が入居者と楽しく生活する為の工夫と視点が
ある。喜びを共有することが出来る。職員は常に笑顔で入居者、家族とコミュニケーションがとれてい
る。法人内の情報共有もスムーズにでき、相互交流ができています。職員は役職、資格にとらわれず業務
が出来、問題意識を持ち意見を述べる事が出来る。入居者は退去後の不安感が解消できるように支
援体制がある。新規入居にあたっては本人と家族と信頼関係が早期に出来るよう対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今年度は、新型コロナ感染という厳しい状況に、地域との関係性は希薄になりつつあるが、菜の花や
チューリップ、阿蘇のトンネル見学等できうる限り外出を支援するとともに、充実したホーム内活動により
楽しい日常を支援している。例としてホーム内初詣、梅みそ作り、野菜作り、花火大会等職員の創意
工夫が随所に表われ、開設当初から継続している「しあわせがいっぱい」とする便りに、理念に掲げる「
家庭的な雰囲気を入居者の個性を生かし安心して暮らせる日常」が表出したホームである。家族へは
不安対策として密に連絡を取り、家族会へのアンケートがテレビ等の寄贈に繋がる等家族との良好な
関係性が築かれている。また、生活リハビリとしての掃除や、超高齢化した中でも毎日新聞に目を通す
事を目標とする方、車椅子も使用せず職員の寄り添いや見守りが事故防止となる等職員の持つケ
ア力や得意分野が発揮され、入居者の笑顔を引き出しながらの日常を見ることが出来るホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて いる (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元との関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の運営理念、経営理念、考え方を共有し、ホーム内のケアにとどまらず、地域への貢献、信頼されるホーム作りを目指し、ガラス張りの運営を目標に実践している。	人間としての尊厳を大切に、家庭的な雰囲気を入居者の個性を生かし安心して暮らせる日常を支援することを理念として掲げ、ケアプラン作成に反映させるとしている。また、隣接の特養の広報誌にホームの情報を載せ地域に発信している。また、職員へは入職時に説明するとともに、研修時等職員の意見等を理念に直結させている。	ホーム長は、職員向け勉強会を開催し更に意識強化を図りたいとしている。年度末にあたり理念を元にした振り返りの機会を作られることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の情報は把握するように努めているが、コロナ禍にて地域イベント等もなく、現在は交流がない状態である。	地域の行事はなくなり、住民との交流は難しい状況にあるが、阿蘇のトンネル見学等車窓から地域を眺めたり、ホーム内に鳥居を作り初詣とするなど職員が創意工夫しながら室内での行事に力を入れている。	敷地内の活動による楽しい生活につなげたいと意欲的である。今まで築き上げてきた地域との関係が、コロナ収束に目処が立てば地域住民との交流が再会されるであろうと大いに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年行っていた、村内、小中学校の職場体験の受け入れや家族会等が出来ない状況下であり、現在は、毎月発行ホームの新聞よりの情報発信だけに留まっている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ感染拡大防止の為、2ヶ月毎の書面配布のみの実施となっている。	今年度は一堂に会することは難しく、写真や報告書を配布している。これまでは家族へも参加を依頼しているが参加が難しい状況にあり、更に家族へも書類を配布したり、外部評価結果報告等も開示されることを検討いただきたい。	グループホームと地域密着型特養と合同での開催であり、メンバー構成の検討余地はあると思われる。新年度の開催時には、今一度運営推進会議を開催する意義を説明いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議への参加依頼、村内行事への参加を行い、協力関係が築けるようにしている。 又、西原村地域包括支援センター運営協議会へ委員として参加している。	運営推進会議の書面を持ち届けながら情報を発信する他、包括支援センター運営協議会や福祉計画策定員としての参画等協力関係を築いている。また、役場福祉課職員や社協等顔見知りという関係にあり、要望もあげやすいとのことである。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊で落ち着かれない時は一時的に施錠を行うが時間的ロックで対応できている。	法人内で身体拘束適正化委員会や事故防止委員会等を開催し、職員にフィードバック(ラインワークスを使用し情報を発信)している。また、ニュース等の事例も全員が共有している。	拘束を行わないホームとして、指針や身体拘束廃止宣言等を掲示されることを期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	併設特養と一体となり管理職の会議において情報を共有しチェックしている。また、内部牽制により、お互い注意し合える職場風土作りに努めている。 ニュース等で取り上げられた事例で関連するものにおいては全職員に情報を発信している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	特養と一体となり管理職の会議において情報を共有し、また、ニュースで取り上げられた事例に関するものは全職員に情報を発信できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前の説明はもちろんの事、退居にあたっては、不安がないよう十分な説明と今後の対応について説明するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍により直接ホームにて話すことは少なくなり、ご家族へはこまめに電話を行って報告を行い、意見を聞くようにしている。また面会時にも近況報告などで職員全員に話し易い様な雰囲気作りを行っている。	コロナ禍の中で家族にはホーム内が見えないのではという思いにたち、密に連絡を取り合い、話しやすい状況を作っている。主治医からの情報も家族と共有し、その時点で意見を聞きとりしている。今年度は家族会にアンケートを行い、秋祭りの開催が難しい状況に、レクリエーション用機器としてテレビやCD等設備面の充実が図られている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見を出しやすい環境である。意見や提案が上がりやすい様日頃よりコミュニケーションをとっている。	ホーム長は職員とのコミュニケーションを図り、夜間帯の職員と個別に要望や意見等を聞き取りしている。また、日常のケアの中での意見等は主任を通じてホーム長へ上申する体制としている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体に人事評価があり本人と上司が評価する仕組みがある。残業を減らし有給取得に努めている。資格取得に対する補助仕組みがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の勉強会の他、法人全体で勉強会を実施。現在、外部研修には行けない状況ではあるが必要となれば、リモートでの研修も行えるよう準備をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により以前のような勉強会や交流を図ることが出来なくなっている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見や思いを聞きだせるよう努めている。又、初期ケアプランにも反映できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に至るまでに行う面接の中で家族の意見も十分参考にしている。アセスメント作成には家族にも手伝って頂き必要なものは初期プランにも反映出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者と計画作成担当者が一緒に面談を行い現状の確認とその時の一番必要な支援を提案出来るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気の中で、共に暮らし支えあう関係を心がけ、人生の先輩として接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍、面会禁止となり、ご家族と会う機会が減少している。その分、電話にて近況報告を行うようにし、ご本人とも話す機会を設けるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者や家族の要望を伺い、定期的にドライブで故郷を訪れたり、墓参り等行けるよう支援している。	家族の面会制限のなかで、窓越面会や電話等により関係性を継続させ、隣接する特養に（入所されている義姉）定期的に訪問したり、スマレ会（介護予防）を利用される方々との交流等を支援している。毎朝新聞に目を通す入居者や、ふるさと訪問として自宅で食事をして帰る等もある。	自宅への受入れも難しい状況や面会も少ない現状もある中で、ホームとして出来る限り社会性の継続に努めたいとしている。今後も、入居者の馴染み深い関係の継続支援に期待したい。また、オンライン面会も可能とされるようであり、家族との関係が一層深まるものと大いに期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の場の雰囲気作りには努めているが、全て職員が介入するのではなく入居者にできる力があれば、利用者同士の支えあいを見守ることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に異動された場合ケアプランを含めた情報の提供を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の言動や暮らしぶりから本人の意向や希望を把握し、必要であればケアカンファレンス、ケアプランを活用し支援するようにしている。	日々の関わりの中で聞き取りし足り、直接の申し出である「帰りたい、次の迎えはいつだろうか」等に、家の近くまで出かけたりと、できる限りの支援に努めている。意思疎通困難な状況には、望まれていることを推察しながら日々のケアに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際は本人や家族、施設担当者から情報を得るようにし、アセスメント用紙を活用することでより深い情報を把握することができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人の有する能力等の現状はアセスメントを使って把握するようにし、ケアカンファレンスや申し送りノートを活用し、職員間の相互理解に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	三ヶ月に一回のモニタリングを行い、スタッフ間での意見を出し合って、より良い支援に繋がるよう取り組んでいる。ケア内容に変更や検討案があれば本人へ提案し、家族へ連絡、意見を聞く様にしている。	家族に年2意向等を聞き取りし、現在はTELで説明しプランを郵送し同意を交わしている。認知症進行予防に向けた目標や、自分のペースでの生活に役割や楽しみ毎等をプランとしている。3ヶ月毎のモニタリング(担当職員とケアマネジャーとの話し合い)により、継続の可否を見極め、結果は全職員が共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や申し送りノート、ケアカンファレンスの活用により情報の共有に努めている。また、モニタリング、ミーティングを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご家族の面会やサービス担当者会議などを通し、意見や要望を取り入れている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内の人的、物的、環境面の資源については広く活用、協働できている。現状の地域、社会資源のみでなく、新しく、資源の掘り起こしをしていくことが課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望等、必要性があれば以前からのかかりつけ医の受診を支援している。又、協力医療機関との連絡を密にし、適時、適切な医療を受けられるよう支援している。	かかりつけ医は、家族の了解のもと全員が系列法人の医療機関としている。専門医については職員による受診の他、オンラインでの診療となった科もある。職員は日々のバイタルチェックをはじめとした健康管理や、隣接特養看護師との連携により、必要に応じ適切な医療を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に行われる回診時には現状を伝え法人内の看護師と連携できるようにしている。特変時等は早急に報告し受診の有無の指示を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はサマリーを使用し、本人の認知面や行動状況について申し送りを徹底している。入院中も面会を多くし、本人の不安を減らすと共に、病院のスタッフと関係作りができるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院時、カンファレンスの際に家族に対し急変時の延命処置、看取りについても聞き取りをおこなっている。	入居時や状態変化など必要に応じ、家族の意向を確認している。また、プラン作成時にも延命措置について聞き取りしている。また、浴槽のまたぎの可否を退所の判断基準として、併設の特養への入所をほとんどの方が希望されており、直近でもホームで長く過ごされた方が、特養で最終を迎えられている。看取りの研修については、現在ラインワークを活用し、ケア向上を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変事のマニュアルを作成し、特養との連携で急変時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を配置し、火災や災害時の避難経路などの確保と、防火点検、隣接特養と合同で年2回の防火訓練とスタッフが自主的に行う防火訓練を行っている。	防火管理者を中心に隣接特養との年2回の防火訓練、ホーム独自に自主訓練をはじめ、災害時の避難経路などを確保し、備蓄はリストをもとに特養で確保している。夜間は防犯上閉門(21時～7時)している。ホームは熊本地震の被害を受けた経緯もあり、当時を振り返る機会を持っている。	昨今の自然災害は想像を超えるものであり、今後も地震を含めあらゆる災害を想定し、机上を含めた訓練の機会を持たれることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護の為、排泄時、入浴時など一人ずつケアを行っている。又、声掛けも耳元で行っている。	入浴や排泄では特にプライバシーへ配慮し、確認した要望は職員間で共有し、個々に応じ支援している。その方にとって聞き取りやすい声かけや、耳元で話しかけ、衣服の選択は好みなども聞きながら必要なサポートを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	定期的に利用者の希望する料理と一緒に作っている。行事企画で外出の機会がある時は本人の希望に沿う様にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者になにか希望がある時は、話を聞いて都度対応を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	御家族に協力頂き本人の好みの服を準備して頂いる。ご本人で選んだり、職員で似合いそうな服を選び着て頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	得意だった料理や昔ながらの調理方法を日常会話の中で聞き出し、回数は少ないが行事企画し一緒に準備や食事を行っている。また、下膳やお盆、テーブル拭きなど積極的に行われる方がおり、いつも感謝の言葉が出ている。	現在、職員の配置上主菜は本体厨房で、他をホームで調理し、常食やカット、キザミなど嚥下状態に応じて提供している。外出が出来ない分食事へ工夫し、10月のランチバイキングやさんま焼き、クリスマスケーキ作り、弁当を準備した忘年会等楽しみに繋げている。また、個々に応じて食への関わりを支援しており、つぎ分け、テーブル拭き、下膳をはじめ、梅みそ作り、昨秋は渋柿がなかなか手に入らなかったようであるが干し柿づくりも実現している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士と協働し、本人の状態に合わせて水分量不足気味なときは、チェックをし必要分摂取していただいている。又、本人の嗜好を大切に、お祝いや行事、普通の食事のメニューに聞き取りをし、取り入れている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア、義歯洗浄を行い口腔清潔に努めている。可能な限り自力にて行っている。舌磨きも行っている。必要時、歯科と連携している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンに合わせ、本人にあった方法で支援している。極力、普通の下着を使ってもらおうようにしている。	可能な限り布下着をはいてもらいトイレでの排泄を支援は、家族の負担軽減につながっている。モニタリングで排泄の要望や状況を共有し、夜間はパットの併用や時にはリハビリパンツを使用される方もおられる。自然排便への取組として、散歩や体操など適度の運動をはじめ、朝食時は飲むヨーグルト、昼はヨーグルトなど乳製品を多く取り入れている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	年齢と共に排便コントロールが難しくなってきた。個々に応じ施設の散歩や体操をしたり、毎日ヨーグルトの提供も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	グループホームでは、一人ひとりがいつでも入浴できるよう、体制を整えている。個々の気持ちを優先し、くつろいだ気分で入浴して頂いている	ホームでは皮膚トラブルへの対応などから、月曜から日曜まで入浴できるよう準備しており、毎日の入浴や、100歳近くになられた方も、入浴前の準備(タオルや下着など)をされている。またぎができるところまでをホームの入居条件としており、全員湯舟での入浴を楽しまれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の際は清潔な寝具を使っただけのよう定期的に洗濯、交換したものを使用。日中ソファなどを活用し、リラックスできる環境づくりを心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	カルテに記入してある「くすりの説明書」をスタッフは必ず読んで内服薬を把握。一日分ずつセットし、毎食時、眠前と確認し、確実に内服行っている。内服に変更あれば記録し、申し送る。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの意思を尊重、又、能力に合わせ、茶碗洗いや、洗濯物たたみなど、ケアプランと連動し行っていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節感を味わえる行事、ドライブへの外出は実施している。コロナ禍により、イベント参加は遠慮している。	感染症が拡大するまでは、隣接特養へのイベントや知人との面会、桜や菜の花見学などに出かけている。昨今は感染症に配慮しながら、開通した阿蘇トンネルやコスモス見学ドライブなどが実現している。外出の機会が少なくなった分、家事活動(掃除機かけ等)や、今年はホールに神社を見立てた鳥居や賽銭箱を作り、参拝してもらうことで初詣として、お正月気分を味わってもらうなど職員のアイデアが活かされている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の金銭所持が理想だが現状は難しく実践できていない。買い物等の際に支払いを一緒にすることなどで実感してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の要望がある場合は、家族へ連絡を入れ、本人が家族と直接話を出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に環境整備に努め、清潔感のあるリビングになるよう工夫している。季節の花や道具を使い、季節感が出るようにしている。	リビングホールは入居者の状態に応じてテーブルをはじめ家具のレイアウトを検討し、昨秋には家族会からテレビが寄贈され、余暇時間などに活用されている。コロナ感染症への対応として、これまで以上に換気や掃除を徹底している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間には、間隔をあけてソファを設置し、気の合う仲間と思い思いの場所でくつろがれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談の上で、本人の使い慣れた物を活かし、馴染みのある居心地の良い環境を心がけている。	居室には洗面台が備わっていることや、馴染み品の持ち込みについて説明を行っている。タンスやテーブルなどの家具を準備される方もおられるが、プラスチックの衣装ケースも多くなっており、押入れに収納している。襖や障子を備えた和の雰囲気から温もりが感じられ、衣替えや居室内の確認は、感染症の対応から職員が中心に行っているが、家族へも衣類の持ち帰りなどは協力を依頼している。	居室は横になったり、部屋へもどった際も不快など無いよう本人や職員によって布団が整頓されている。今後も一人ひとりに応じて、居心地のよい居室作りへの取組に期したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能に合わせた福祉用具を活用し、危険防止に努め、自分の力を生かし動けるように支援している		